

株式会社らむれす(三角山放送局) の取り組み

株式会社らむれす 三角山放送局
杉澤洋輝

日本の放送メディア概史

☆1925(大正14)年3月、東京放送局JOAK

がラジオ放送を開始。**日本のラジオは2021年で96年。**

☆1953(昭和28年)2月NHK、8月に日本テレビがTV放送を開始。日本のテレビは今年で68年。

☆1970年代、AM(振幅変調)ラジオのみならず、**FM(周波数変調)ラジオの開始、ステレオ放送によるラジオ革命。**

☆CATV(ケーブルテレビ)、CS・BSなどの衛星放送、インターネット放送、ワンセグ放送など、**多チャンネル化。**

☆2011年7月24日TV地上アナログ放送終了。

☆2016年、AMラジオ局のFM補完放送(**ワイドFM**)が、北海道でもスタート(HBCラジオ・STVラジオ)。

コミュニティFMとは何か

- 2020年12月現在、全国のコミュニティ放送局は331局。北海道では28局。
- 超短波放送(FM)用周波数(VHF76.0~90.0MHz)を使用する放送で最大出力は20Wです。
- 放送エリアが地域(市町村単位)に限定されるため、地域の商業、行政情報や独自の地元情報に特化し、地域活性化に役立つ放送を目指す。
- 防災・災害放送では地域と緊密な連携を保つなど、様々な地域課題に放送を通じて貢献。
- 設立基準の規制緩和が進み、法人格を有する起業者(規模の大小は問わない)のほか組合など団体でも開局可能。

(以上、日本コミュニティ放送協会HP より)

三角山放送局のおきて

★ステーションコンセプト「いっしょに、ねっ」

- ①伝えたいことがある人がマイクの前に座ること。
- ②お年寄り、子ども、障害のある人、LGBTの人、外国人、少数者や弱い立場の人たちの声を、決して切り捨てず、積極的に届けること。
- ③放送で嘘はつかないこと。



⇒誰もが思いを発信できる
放送局を作ろうとした

誰でも発信する権利がある

★いままでの放送局は、マイクを持つ人は限定されていた。

- ⇒一般市民が情報を発信してもいいはず。
- ⇒伝えたいことがある人がマイクの前に座る。
- ⇒一般大衆が誰でも発信者(パブリックアクセスの推進)
- ⇒小さな局だからこそ、言論の自由を守り保持できる。
- ⇒「民主主義」とは“発言”そのものである。

★情報の出し手と受け手をボーダーレスにする試み。

- ⇒地域の限定性を逆手にとり、境界を越えた受発信。
- ⇒不特定多数どうしが複雑に交錯する(ネット社会の特徴)

★三角山放送局はあくまでもそのステージでしかない

- ⇒市民が伝えるための場の提供
- ⇒150名の市民パーソナリティに支えられている

「いっしょに、ね」の精神

★おきて②: 社会的少数者の声を、決して切り捨てず、積極的に届けること。

◇視覚障害者がパーソナリティ「耳をすませば」「音を頼りに音便り」

◇さっされん(福祉作業所)の利用者が出演「飛び出せ地域共同作業所」

◇車いすユーザーがパーソナリティ「飛び出せ! 車イス」

◇パーソナリティがLGBTQ「ハッピーゲイアワー」「にじいろスマイルラジオ」

◇英語・中国語・韓国語だけで放送「サッポロ・ナビゲーション」

◇札幌刑務所受刑者のリクエスト番組「苗穂ラジオステーション」

◇乳がん早期発見、早期治療を呼び掛け・がん患者応援番組

「ピンクリボン in SAPPORO」

◇ALSと闘病するパーソナリティによる「ALSのたわごと」

三角山放送局は「いっしょにね」における 放送と福祉をどう考えたか・・・

- 地域社会は福祉を抜きに考えられない
 - 地域福祉課題を伝え、議論の場を提供していくのは、コミュニティFMの使命
 - 少子高齢社会、人口減少、単身世帯急増、貧困、社会的介護、生活保護をめぐる問題、児童虐待、DV、がんサバイバー、自殺増、孤独死等
 - 無縁社会から有縁社会へ
- ⇒ 誰もが日常的に伝えられる場づくりが重要

誰もが思いを伝えられる放送局を 目指して…

- 開局時から放送を続けている、
車イスのパーソナリティ・山本博子さんは
- 交通事故により、首から下が不自由に。
電動車イスで放送局に通っている。
- 放送局の建物がバリアフリーではなかった。
- →ビルの玄関とスタジオの入口にスロープを設置。
- →地域の方がボランティアで放送をサポート。
カフの上げ下げや原稿の受け渡しを手助け。

無いものは、作っちゃえ！

- スタジオ内で使用する放送機材はバリアフリーではない！
- ⇒「無いものは、作っちゃえ！」と、北海道立工業試験場(現・北海道立総合研究機構 工業試験場)さんと共にバリアフリーな放送機器を開発しました！
- エンジェルブレス
- ブルブルキューを開発！



- エンジェルブレスを使用するようになって
- “自分でできる”ということの喜び
- 心の負担が減り、気持ちよく放送に臨める
- 簡単かつ気軽にディレクターと会話ができ、
- コミュニケーションが活発になった



●「耳をすませば」初代パーソナリティ： 福田浩三さんと盲導犬のセディくん

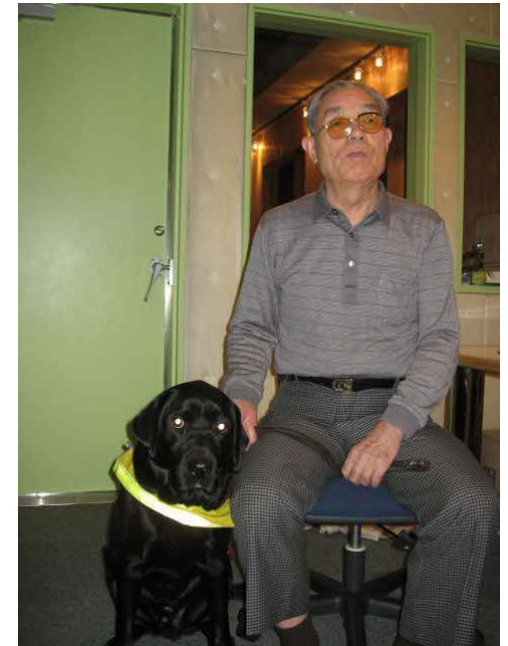
福田浩三さんは、網膜色素変性症により
40代で光を失い、開局時より番組を担当
してくれました。2005年頃から盲導犬セディくん
と共に放送局へ通っていました。

盲導犬育成の寄付を目的とした

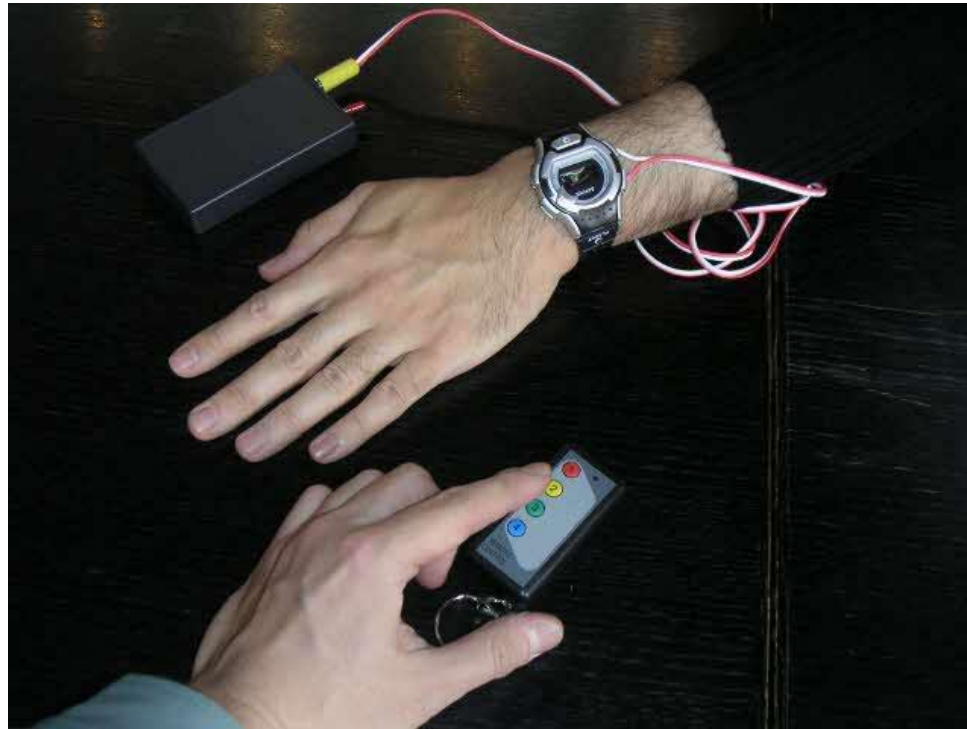
「盲導犬チャリティわんわんコンサート」

を自ら提唱し、放送局とともに3回開催、実行委員長を務め、
このイベントは、「いっしょにね！文化祭」の基礎となりました。

2013年10月逝去。番組は有志の皆さまのおかげで現在も継続し、
「いっしょにね！文化祭」の仲間たちの番組としても機能しています。



- ブルブルキューを使用したことで
- ブルブルキューは、ディレクターから直接、合図を受け取ることができる。
- 確実なタイミングが分かり、スムーズに喋れるようになった。



開発放送機器のバリエーション

- 開発する中で様々な機器が誕生しました。
- 自分が使いやすい放送機器を選ぶことができます。

肢体が不自由な方への対応



カフ（マイクスイッチ）



インターフェースボックス

使用者に合わせて選択



ジョイスティック



エンジェルプレス
（呼気スイッチ）



タッチスティック



タッチパッド



タッチスイッチ

視覚障がいの方への対応



ディレクターからキュー
（喋り始める合図）



ブルブルCUE
（振動モータによる無線キュー）

いっしょにね！文化祭の特徴

- 多様な人たちが同じステージでパフォーマンスを繰り広げる文化発表会。
- 理念は「いっしょに、ねっ」:テーマは相互理解
- 異なる団体やサークル間の連携ステージも活発に行われ、よりお互いを知り合う
- 当事者団体、行政、大学、医療機関、企業、NPOなど地域における多様なプレイヤーが集結。
- 北海道、札幌市などの助成、民間団体の助成、企業からの協賛金によって経費を工面。

これまでの歩み

・ダンス、歌、バンド演奏などのステージパフォーマンスのほか、絵画や工芸品などの作品展示を実施。文化祭開催当初の舞台発表では、参加団体それぞれのパフォーマンス発表のみでしたが、4回目の平成29年度からはコラボレーションが可能な団体同士が共同して新たなパフォーマンスを創作、発表したり、ラストには全員参加の「合同パフォーマンス」をおこなうなどその取組は年々進化しており、当日は、参加団体や来場者間での交流がさらに深まる、きっかけづくりの場にもなっています。



いっしょに、ね社会の醸成

●文化祭の開催に向けて、出演者ミーティング（事前発表会）や実行委員会を重ね、準備段階から障がいの有無にかかわらず、出演する人たちが交流を深め、一緒に楽しみ、助け合いながら作り上げています。

●障がい者の文化活動への参加意欲の喚起はもとより、健常者の障がい者に対する理解の深化、障がいを持つ当事者と支援する各団体を繋ぐ貴重な交流機会の場としても、共生社会の形成という面で大きな貢献を果たしています。

●さらには、この文化祭の来場者や地域の各種団体から、地域のさまざまなイベントやお祭りへの参加を打診されるなど、お互いを認め合う共生社会のきっかけづくりに寄与しています。



リモート出演で参加形態も多様に



ニュースタイルでの「いっしょにね！文化祭」を実現

- ①リモート参加の新形態:より多くの方に参加いただけた
- ②ステージ台を設けずフラットにし、空間を広く使えた
- ③4時間30分⇒3時間30分となり、出演者もお客様も間延びせず集中して参加できた

令和元年度「障害者の生涯学習支援活動」に係る 文部科学大臣表彰を受賞しました



令和元年12月3日、東京・文部科学省において「いっしょにね！文化祭」実行委員会が標記の表彰をいただきました。この表彰は、平成29年度より行われており、障がいのあるかたの生涯学習を支える活動を行う個人または団体について、活動内容が他の模範と認められるものに対し、その功績を称えるものです。

地域メディアって？

住民どうし、住民と企業、住民と行政など、問題は多様である。

関係者の利害、問題の正確な把握、現状認識は難しい。

①地域課題をわかりやすくして、伝える

②地域について、意見を交わしたり話し合う場の提供

③日常的な情報のやり取り

④住民が主体的にメディアで発信できる場



三角山放送局の地域メディアとしての役割

地域をかき混ぜ、新しい価値を創出すること

⇒ひとを放っておけない社会にするために。

「地域内の多様な組織・団体・ひとの相互連携を通して、暮らしの中に生まれる問題を取り除くための情報伝達者であり、議論の場の提供者であること」

「いっしょにね！文化祭」もその活動のひとつ



地域REMIX



これからのラジオ

【2010年の国勢調査】

世帯構成において、初めて単身世帯が最多に
32.1%、1678万5千世帯

【2015年の国勢調査】

さらに増えて32.5%、1684万5千世帯

★地域交流の母体に変化

1. 家族的属性による交流(ママ友、おやじの会など)
2. 階層ごとの交流(富裕層、中間層、低所得層、住宅地の地縁など)
がしたくてもできない時代へ。交流母体が消滅する時代。

ラジオの原点にかえろう

★コミュニケーションの原点は、対話であり人の声。

★対話とは、「同じような考えに共感し」、
「異なる考えを許容し聞く耳を持つ」こと。

★「オレはこう思うけど、アンタはどう思う？」
これがラジオです。

★【共感確認メディア】であり【異論受容メディア】
【情報発信型ラジオ】から【静かに寄り添うラジオ】へ

いま、まさにラジオ100年のカウントダウン⇒原点

結論として

★マチの総合情報案内所：ポータル機能（入口）

➡ ココならなんでもわかる

★人と人、人と団体・組織が出会う拠点

➡ 新たなつながり、“ラジ縁”の創出

★コミュニケーション循環による風通しの良さ

➡ 議論の場、相互理解のためのステージ

地域の縁側機能

ますます広がる「いっしょに、ねっ」

木曜13:00～14:00「パラスポ三角山」

パーソナリティ: 戸田雄也
(パラ・ウェイトリフティング選手)
誰もがスポーツを楽しめる
共生社会を目指して!



三角山放送局の「いっしょに、ねっ」と

SDGs「誰一人取り残さない」に共通する思い



木曜14:00～15:00
「地域で見つける～

三角山SDGsトーク」
身近な地域活動をSDGs的視点で捉え直す。その中からSDGsの種や気づきを見つけ、行動促進につなげたい!